

ティベリウスによる numen Augusti の祭壇奉獻について

山本晴樹

I

ローマ皇帝礼拝の成立に関しては、16世紀にフランス南部の都市ナルボンヌで発見された「ナルボの祭壇 (ara Narbonensis)」⁽¹⁾がとりわけ考察の対象となってきた。というのも、この祭壇の正面と右側面には碑文が施され、そこにはアウグストゥスの晩年に彼のヌーメン (神霊) に対する礼拝の設立が記されているからである⁽²⁾。以下はその正面碑文冒頭 (1,1-6) である⁽³⁾。

T. Statio Taur(o) / L. Cassio Longino / co(n)s(ulibus), X k(alendas) octobr(es) numini Augusti votum / susceptum a plebe Narbo/nensium in perpetuum⁽⁴⁾.

T. Statilius Taurus と L. Cassius Longinus がコンスルの時 (後11年)、10月1日から10日前の日 (9月22日) に、アウグストゥスのヌーメン (神霊) に対して、誓願がナルボのプレプスによって永久に引き受けられた。

ここでは、アウグストゥス晩年の後11年、彼の誕生日である9月23日 (dies natalis) の前日である9月22日に、ナルボ (現ナルボンヌ) のプレプス (平民) がアウグストゥスのヌーメン (神霊) に対して、恒久的な礼拝の誓約を行っている。ここに皇帝礼拝の成立が読みとられたわけである。

周知のようにアウグストゥスのゲニウス (Genius) に対する礼拝は、既に前7年に首都ローマで導入されており、そのための祭壇に対して、主に解放奴隷が祭儀を主宰した⁽⁵⁾。しかし、ここナルボではアウグストゥスのゲニウスではなく、彼のヌーメンに対して礼拝がなされているのである。このことが、「ナルボの祭壇」の理解を複雑なものにした。

一般には、「ナルボの祭壇」の中心的祝祭日がアウグストゥスの誕生日とその翌日であるところから、彼のヌーメンはゲニウスとほぼ同じものと考えられた⁽⁶⁾。しかし、「ナルボの祭壇」の建立の直接的なきっかけは、ナルボのプレプスと都市参事会との確執をアウグストゥスがプレプス側にたって調停したことに対する感謝から発したといわれているので (1,29-33)⁽⁷⁾、アウグストゥスのゲニウスへの礼拝とはいささかニュアンスが異なる。ここに、彼のヌーメンといういわば神的な力に対する礼拝が生じた原因が考えられる。

しかし、このアウグストゥスのヌーメンへの礼拝が果たしてここナルボで創設されたのかと問

われると、にわかには答えがたい⁽⁸⁾。というも「ナルポの祭壇」の碑文の場合、正面碑文と右側面碑文との作成年代には少なくとも一年間の時間的間隔がある⁽⁹⁾。M.Gayraudは、ナルポの祭壇の碑文内容をローマ当局へ提示し、許可を得なければならなかったことから生じた時間的間隔ではないかと推測している⁽¹⁰⁾。また右側面碑文には祭壇の維持管理の詳細に関しては、ローマのアウエンティヌス丘にあるディアナの祭壇の規定 (lex arae Dianae) に準拠すべしとも記されている (I.20-22) ⁽¹¹⁾。

これらのことからすれば、ナルポのnumen Augustiへの礼拝は一属州都市で創設されたというよりもむしろ、ローマにある原型がモデルとされたと考える方が自然のように思われる。

II

このような中で今回取り上げるのが後6年にティベリウスによって奉獻されたとされるnumen Augustiの祭壇である。このara numinis Augustiに関する史料としてはTh.Mommsenが校訂・復元した以下の碑文 (CIL I 2,p.231 (Fasti Praenestini⁽¹²⁾)) がある。

Pontifices, a[ugures, XV vir(i) s(acris) f(aciundis), VII] vir(i) epulonum victumas / in[m[ola]nt n[umini Augusti ad aram q]uam dedicavit Ti(berius) Caesar. / Fe[licitat]i q[uod T. Caesar aram] Aug(usto) patri dedicavit.

祭司、鳥占官、祭儀執行十五人委員、祝宴係七人委員は生け贄を捧げる。アウグストゥスのヌーメン (神霊) のために、以下の祭壇に対して、その祭壇をティベリウス・カエサルは奉獻した。幸運の女神のために。というもティベリウス・カエサルは祭壇を父アウグストゥスへ奉獻したからである。

このMommsenによる復元をL.R.Taylorは「非常に可能性のある復元 (very probable restoration)」として支持した⁽¹³⁾。ただしその後、彼女は後半部分 (ティベリウス期の追記といわれている) に関しては、《Fe[licitat]i》という読みは祭壇の奉獻の対象としては不自然であるとして退け、以下のように訂正している⁽¹⁴⁾。

Fe[ri]ae ex s(enatus) c(onsulto) q[uod e(o) d(ie) T(iberius) Caesar aram Divo] Aug(usto) patri dedicavit.

元老院議決による祭日。というもこの日にティベリウス・カエサルは父である神皇アウグストゥスへ祭壇を奉獻したからである。

この Taylor の Mommsen に基づく読みは、A. Degrassi⁽¹⁵⁾ にも引き継がれ、定説とされるようになった⁽¹⁶⁾。

その後、多様な図像を参照しながらローマ皇帝礼拝研究を行った A. Alföldi もティベリウスの *ara numinis Augusti* の典拠としては Degrassi のそれを挙げている。そして彼はこの祭壇の設立日時を後 6 年 1 月 17 日と特定した⁽¹⁷⁾。また現在パリのルーブル美術館に所蔵されている Grimani レリーフがティベリウスのこの祭壇に他ならないことも指摘している。彼によれば、この祭壇は本来相似の祭壇をもち、残存している祭壇ではティベリウスが、欠落している他方の祭壇ではおそらくゲルマニクスが祭祀を主宰したという⁽¹⁸⁾。

Ara numinis Augusti に関する Mommsen 以来の定説はこのようにして疑問の余地のないものと見なされた。しかし 1982 年、R. T. Scott がこの定説に批判を加える。彼は Mommsen 以来、〈N〉と読まれてきた箇所を〈M〉と訂正し、〈n[umen ...]〉を、〈m[aior(es) ...]〉と読み直したのである。すなわち、Scott によれば、当該碑文は以下ようになる（下線部が読み直した箇所）⁽¹⁹⁾。

Pontifices, a[ugures, XV vir(i) s(acris) f(aciundis), VII] vir(i) epulonum victumas /
inm[ola]nt m[aior(es) provid(entiae) Aug(ustae/i) ad aram] q[uam] dedicavit Ti(berius)
Caesar.

祭司、鳥占官、祭儀執行十五人委員、祝宴係七人委員は大型の生け贄を捧げる。アウグストゥスのプロウイデンティア（先見の明）のために、以下の祭壇に対して、その祭壇をティベリウス・カエサルは奉献した。

つまり、Scott は *numen Augusti* ではなく、*Providentia Aug(suti/a)* をこの箇所に読み込むわけである。Scott は、まず奉献年が後 6 年であることに注目し、この年がティベリウスがアウグストゥスの事実上単独の養子となった年であること⁽²⁰⁾、また奉献日である 1 月 17 日がアウグストゥス（当時オクタウィアヌス）とリウィアの結婚記念日であり、養父アウグストゥスおよび実母リウィアへのティベリウスの感謝の色彩が強いことなどを根拠に、空白箇所にはアウグストゥスの *genius* あるいは *numen* よりも *Porvidentia* が補われるべきことを指摘した⁽²¹⁾。

しかしこの Scott 説に対しては、ローマ皇帝礼拝研究に新たな進展をもたらした I. Gradel が、*Ara Providentia* の奉献日はこの日（1 月 17 日）ではなく、6 月 27 日であること、欠落した箇所を Scott の省略形の方法で補うには無理があること、そしてなによりも、碑文に現れた祭壇の奉献の対象はあくまでもアウグストゥス自身であって *Providentia Augusti* というようなアウグストゥスの属性ではないことを理由に、Scott 説を退けている⁽²²⁾。

かといって、Gradel は Mommsen 説に帰るかというところではない。彼は、Scott が従来 〈n[...]〉と読まれてきた箇所を 〈m[...]〉と読み直したことに關しては、*Fasti Praenestini* の当該箇所の文

字の形状を精査したうえで、正当なものと評価する。そしてGradel自身はここに《Mars Augustus Pater》を読み込んでいる。さらに彼はティベリウスによるアウグストゥスのヌーメンに対する祭壇 (ara numinis Augusti) は「近代の学問の亡霊 (a ghost of modern scholarship)」とまで断じるのである⁽²³⁾。

これに対してこれまでのローマ皇帝礼拝研究を集大成したD.Fishwickは、文字の形状から《n[umen...]》を否定するGradelの批判は当たらないとしている。Fishwickは当該の碑文では《M》と《N》の文字の形状はGradelが指摘するほど明確に区別することは困難であるとして、《N》ではなく《M》と読むべきとするGradelを批判した⁽²⁴⁾。従って、Fishwickは《Mars Augustus Pater》とするGradelの読みも認めないことになる。結局、FishwickはDegrassiおよびAlföldiの所説によりながら、後6年1月17日にTiberiusによってara numinis Augustiがローマで奉獻されたと理解している⁽²⁵⁾。

このFishwickの指摘は、Fasti Praenestiniの当該箇所を見る限り、その形状から確実に《M》を読み込むことは困難であり、Fishwickの指摘は当を得ており、筆者も彼の説を支持したい。またGradelはnumen Augustiの礼拝がアウグストゥスの存命中に現れることは「アウグストゥス的な(問題)解決における革命的な進展 (revolutionary development in the Augustan settlement)」であるとして、あり得ないという立場をとっているが⁽²⁶⁾、しかしその一方で彼の挙げる《Mars Augustus Pater》の読みの根拠は確固たるものではない。というのも、Gradel自身がこの問題については今後の研究に待つとしているからである⁽²⁷⁾。このように、Gradelはモムゼン以来ほとんど疑われることのなかったティベリウスによるara numinis Augustiの存在を、「近代の学問の亡霊」と切って捨てたわけであるが、Fishwickによって改めて碑文を検討してみると、Gradelの批判は必ずしも正当なものではなかった。

III

様々な曲折を経ながら、後4年6月26日アグリッパ・ポストゥムスとともにアウグストゥスの養子とされたティベリウスは、アグリッパが失脚した2年後の後6年、アウグストゥスとリウアの結婚記念日である1月17日にNumen Augustiの祭壇をおそらく養子ゲルマニクス⁽²⁸⁾とともに奉獻した⁽²⁹⁾。この祭壇の置かれた場所は特定されていないが、L.R.Taylorによればパラティヌス丘にあるアウグストゥスの家とアポロ神殿の間のところであったという⁽³⁰⁾。

ティベリウスがara numinis Augustiを奉獻した動機に関しては、やはり後4年にアウグストゥスがティベリウスを養子とし、後6年にはティベリウスが事実上単独の養子とされたことに対する感謝がまず挙げられるであろう。更に養子になるに際して、実母リウアがアウグストゥスへ大いに働きかけたこと⁽³¹⁾に対する感謝もまた考えられる。

この感謝の表現として、ティベリウスはAugustus彼自身ではないが、彼のヌーメンを礼拝の対

象とする祭壇を奉獻することによって、アウグストゥスの神格化を一段と進めた。このことはティベリウス自身にとって養子としての地位を確固たるものにすることもあった⁽³²⁾。また奉獻日として 1 月 17 日というアウグストゥスとリウシアの結婚記念日が選ばれたことは、ティベリウスが、神格化されつつあるアウグストゥスに、その妻にして母親であるリウシアを通してつながっていることを暗示させたであろう。いずれにせよ、ara numinis Augustiの奉獻は、ティベリウス政権成立期⁽³³⁾において彼の後継者としての地位を強化させたと思われる⁽³⁴⁾。

それでは最後に、ティベリウスのara numinis Augustiとわれわれが最初に述べた「ナルボの祭壇」との関係について触れたい。スエトニウスによれば、ティベリウスの父Ti.Claudius Neroはカエサルの命により前 45 年⁽³⁵⁾、退役兵植民市ナルボとアレラーテ（現アルル）を建設した⁽³⁶⁾。それ故、クラウディウス家はナルボにとっては都市パトロン的な地位にあった可能性がある⁽³⁷⁾。また後のクラウディウス帝の時代のことになるが、ナルボの正式名称に《Claudius》という形容辞が加えられた⁽³⁸⁾。このことからすれば、クラウディウス家はナルボと密接な関係を保っていたものと思われる。とすると後 12/13 年に建立されるナルボのara numinis Augustiは、それ以前の後 6 年にローマで創設されたとされるnumen Augustiの礼拝からクラウディウス家、更には言えばティベリウスを介して何らかの影響を受けたのではなからうか。あらためて ara numinis Augustiとしての「ナルボの祭壇」を首都ローマとのつながりのなかで再検討する必要があるように思われる⁽³⁹⁾。

註

- (1) 現在ナルボンヌの市庁舎内にある考古博物館に展示されている。形状は正面と右側面のみ碑文が施されており、左側面と裏面は未加工であるので、果たしてこれが「祭壇(ara)」と呼ぶうかはなはだ疑問であるが、ここでは旧来の説に従う。おそらくはより大きな方形の記念碑の右角を占めていたものと思われるものの、本来の姿は未解明である。なおこの碑文は一般には 2 世紀の復刻といわれているが、右側面碑文の冒頭部 (l.3-5) にはdamnatio memoriaeとおぼしき部分があり、この箇所が 2 世紀にも復刻されたとは考えにくく、そうであればこの碑文は後 12/13 年に作成された原形である可能性もある。「ナルボの祭壇」の原形の形状については故ミシェル・ジャン (Michel JANON、当時フランス国立科学研究センター (CNRS)・古代建築研究所 (IRAA) 研究員) 氏の口頭での示唆による。同祭壇右側面碑文のdamnatio memoriaeについては、A.Lebègue, E.Germer-Durand et A.Allmer (ed.), *Recueil des Inscriptions antiques des parties de la Province de Languedoc*, 1893, 5 (in: *Histoire Général de Languedoc* XV, 117-124) 参照。
- (2) アウグストゥスの晩年に彼個人のヌーメンが現れることに関しては以下を参照。D.Kienast, *Augustus: Prinzeps und Monarch*, Darmstadt 1999, 255f.
- (3) CIL XII, 4333 = ILS 112. Ara Narbonensisの碑文についての詳細は以下を参照。M.Gayraud, *Narbonne antique des origines à la fin du IIIe siècle*, Paris 1981, 358-366. 拙稿「Ara Narbonensis 碑文 (CIL XII, 4333) をめぐって」『史学論叢』(別府大学史学研究会) 21 (1990 年 6 月) 105-116 頁、同「「ナルボンヌの祭壇」碑文 (CIL XII, 4333) 再考」『史学論叢』33 (2003 年 3 月) 1-13 頁 (= 拙稿 2003)。

- (4) 正面碑文の文字の大きさは1行目4.6cm、2行目4cm、3行目3.7cm、4行目2.7cm、5、6行目2.7cmである。7行目から末尾(36行目)までは全て1.7cmであるので、冒頭6行は正面碑文で最も目立つ部分である。Cf.CIL XII,p.530.祭壇の写真は拙稿2003、2頁(正面)、6頁(右側面) 参照。
- (5) この制度に関しては、毛利晶氏の一連の研究を参照されたい。主に「所謂<アウグストゥスによるラレス祭儀の改革>とローマのウィーコマギステル」【史学雑誌】第100編第3号(1991年3月)1-35頁。
- (6) Gayraudはこのヌーメンをゲニウスと同一視するものの、一方ではアウグストゥスの晩年には彼のヌーメンは、ゲニウスを越えるものになったのではないかと考えている(Gayraud,op.cit.,363)。
- (7) Gayraud,op.cit.,362.
- (8) この祭壇碑文に、皇帝礼拝を担う祭司であるアウグスターレースの創設行為(Gründungsakt)をみる研究者もいる。Cf.P.Kneiβl,Entstehung und Bedeutung der Augustalität : Zur Inschrift der ara Narbonensis(CIL XII.4333), *Chiron* X(1980),291-326,318.
- (9) 正面碑文ではアウグストゥスのTribunicia potestasは34回目(11年7月1日~12年6月30日)であり、右側面では35回目(12年7月1日~13年6月30日)となっている。Cf.Gayraud,op.cit.,361.
- (10) Gayraud,op.cit.,364.
- (11) lex arae Dianaeについては以下を参照。J. Cels-Saint-Hilaire,Numen Augusti et Diane d'Aventin: Le témoignage de l'ara Narbonensis, *Les grandes figures religieuses*, Paris 1986,455-502,486f.
- (12) Fasti Praenestiniについては、スエトニウスが1世紀前半の修辞家M.Verrius Flaccusについて述べた文章の中に言及がある。「プラエネステには、彼の手でととのえられ大理石の壁に刻まれた暦を奉獻した半円座(hemicyclium)のそば、フォルムの一際高い所に像が立っている。」「文法家・修辞家列伝」17.4(原賢治・大谷哲・小坂俊介共訳)【*Studia Classica*】2(2011年)263頁。
- (13) L.R.Taylor, *The Divinity of the Roman Emperor*, Middletown,1931,227. Taylorは祭壇の場所として、最初カピトリヌス丘にあるユリウス家の祭壇(Ara Gentis Iuliae)を推定したが、その後パラティヌス丘のアポロ神殿とアウグストゥスの家との間に建立されたと訂正している。Cf.L.R.Taylor,Tiberius' ovatio and the ara numinis Augusti, *AJPh* 58(1937),185-193(=Talyor 1937),190n.18.またTaylorは奉獻時期を後5年あるいは9年としている(p.191)。
- (14) Taylor 1937,187.
- (15) A. Degrassi, *Inscriptiones Italiae* XIII,2,115.
- (16) 帝政最初期に関するEhrenberg and Jonesの定評ある史料集もこの定説を採用している。Cf. V. Ehrenberg and A.H.M.Jones, *Documents illustrating the Reign of Augustus and Tiberius*, Oxford, 1967,46.
- (17) A.Alföldi, *Die Zwei Lorbeerbäume des Augustus*, Bonn, 1973,39-44(写真はTafel XVI 2、再現想像図はTafel XVI 1)。
- (18) Alföldiはこれに関連して、同じara numinis Augustiである「ナルボの祭壇」を取り上げ、その礼拝の担い手である3人のローマ騎士(equites Romani a plebe)と3人の解放奴隸(libertini)は6人一体の祭司団ではなく、Grimaniレリーフ(の想像図)に描かれているものと同様二対の祭司団ととらえている(S.44)。

- Alföldiの見解からすれば、この祭司団は後のアウグスターレース (seviri Augustales) にはつながらないことになる。いずれにせよ Alföldiの指摘は「ナルボの祭壇」研究に新たな展開をもたらすように思われる。
- (19) R.T.Scott, *Providentia Aug.*, *Historia* 31 (1982), 436-59, 440f.
- (20) 後 4 年にティベリウスとともに養子とされたアグリッパ・ポストゥムスはこの年までには失脚していた。Cf. B. Levick, *Tiberius the Politician*, London and New York 1999, 57; D. Kienast, *Römische Kaisertabelle*, Darmstadt 1996, 75.
- (21) Scottはティベリウスが鋳造した《Divus Augustus Pater》銘を伴う貨幣の裏側には《Providentia》銘とその祭壇の図像が現れていることを一つの根拠としている。Cf. Scott, *op.cit.*, 445 (図像 p. 459, 1-2).
- (22) I. Gradel, *Emperor Worship and Roman Religion*, Oxford 2002, 238n. 10.
- (23) Gradel, *op.cit.*, 238.
- (24) D. Fishwick, *The Imperial Cult in the Latin West*, III 4 (2005), 237-245, 241.
- (25) Fishwick, *op.cit.*, II 1 (1991), 378.
- (26) Gradel, *op.cit.*, 248.
- (27) Gradel, *op.cit.*, 238n. 11.
- (28) ティベリウスはアウグストゥスの養子となるとともに、ゲルマニクスを自己の養子とした。Cf. Levick, *op.cit.*, 50 n. 7; Kienast, *op.cit.*, 80.
- (29) Alföldi, *op.cit.*, 44.
- (30) Taylor 1937, 190n. 18 (註 13 参照).
- (31) Suetonius, *Tiberius*, 21.4: sed expugnatum precibus uxoris adoptionem non abnuisse.
- (32) 島田誠氏は「皇帝の死後の神格化と神なる皇帝たちへの礼拝」¹が、「確定した規則の存在していなかった帝位継承を安定させる機能をもっていた」と指摘している（「皇帝礼拝と解放奴隷」『岩波講座世界歴史 5 帝国と支配 古代の遺産』岩波書店 1998 年 245-267 頁、258 頁）。
- (33) ティベリウス政権成立期を《Domus Augusta》の成立という新たな観点から注目する研究については以下を参照されたい。島田誠「ティベリウス政権の成立とその性格」『学習院大学研究年報』第 47 輯 (2000 年) 29-54 頁。
- (34) 同年の後 6 年 1 月 27 日にティベリウスはフォルム・ローマヌムに面する南東隅に、すでに亡くなっていた実弟ドルススの名とともに双子神カストルとボルックスの神殿を奉獻する。P. Schrömbges はその著書 (*Tiberius und die Res publica Romana: Untersuchungen zur Institutionalisierung der frühen römischen Principats*, Bonn 1986) において、ティベリウスによる ara numinis Augusti の奉獻とこのカストルとボルックス神殿の奉獻について以下のように述べている。「アウグストゥスのヌーメンへの礼拝とカストルとボルックス神への礼拝は、このアウグストゥス的な主張が、職務を代行し帝位を継承する Princeps に対して妥当することを強調した (die Kulte des numen Augusti und der Dioskuren unterstrichen die Gültigkeit dieses augusteischen Anspruches für den amtierenden und nachfolgenden Princeps.)」(S. 53f.)。ほぼ同時期に生じた二つの奉獻を帝位継承に関連づけて言及するものであるが、これについて論じる用意は現在

の筆者にはない。

- (35) Gayraud, *op.cit.*, 179.
- (36) Suetonius, *Tiberius* 4.1: Pater Tiberi, Nero, quaestor C. Caesaris Alexandrino bello classi praepositus, plurimum ad victoriam contulit. quare et pontifex in locum P. Scipionis substitutus et ad deducendas in Galliam colonias, in quis Narbo et Arelate erant, missus est.
- (37) Gayraudはクラウディウス家がナルボの都市パトロンであった可能性を示唆している (Gayraud, *op.cit.*, 349f.)。なお帝政期の都市パトロンについてはイタリアの事例が中心であるが以下を参照されたい。島田誠「帝政期イタリアにおける都市パトロン」『西洋古典学研究』38 (1990年3月) 73-82頁。
- (38) C.H. Benedict, *A History of Narbo*, Princeton 1941, 28; A.L.F. Rivet, *Gallia Narbonensis: Southern Gaul in Roman Times*, London 1988, 134.
- (39) 藤井崇氏は皇帝礼拝に、皇帝と属州民とのコミュニケーションの一環としての側面を見出している。同氏「キプロス島におけるローマ皇帝崇拝-ティベリウス帝への宣誓儀礼を中心に-」『西洋古典学研究』LIX (2011年) 84-95頁。

(附記)

脱稿後、Ed. Champlin, *Tiberius and the Heavenly Twins*, *JRS* CI (2011), 73-99を得た。ティベリウスによるカストルとポルクス神殿奉獻についての新しい解釈を提示する魅力的な論考であるが、詳細の検討は後日を期したい。

Tiberius' dedication of the altar to numen Augusti

By investigating precisely the inscription about the altar which Tiberius dedicated to numen Augusti in 6 A.D., I. Gradel maintained that this altar was "a ghost of modern scholarship", because the deification of Augustus during his lifetime was a "revolutionary development in the Augustan settlement". But D. Fishwick reviewed this inscription and denied Gradel's interpretation. I accept Fishwick's theory. Tiberius, I assumed, tried to deify not Augustus himself, but his numen in order to make solid his position as the only adopted son of Augustus who was already Divi (Iulii) filius.

YAMAMOTO Haruki
Beppu University